



【シンポジウムⅢ】 「災害に強い日本型畜産の構築のために」

座長 あいさつ

大山憲二 氏

神戸大学大学院 農学研究科附属 食資源教育研究センター 教授

皆さん、おはようございます。定刻になりましたので、ただ今より分科シンポジウム3「災害に強い日本型畜産の構築のために」でシンポジウムを開催したいと思います。

最初に本シンポジウムの開催の趣旨をお話させていただきますけれども、我々は御存じのように災害の非常に多い国土に暮らしております。神戸で発生した阪神・淡路大震災もそうでしたけれども、一たび大規模な災害が発生すると、人と同様にペットも被災することになります。ペットの被災に関しては、このシンポジウムを主催しておられる Knots さんなどの活動もありまして、かなり社会的な認知が進んでおり、多くの人の理解を得ている状況が生まれつつあるのかなと考えております。

一方で、ペットの他に我々の生活の周りには産業動物と言われる、いわゆる家畜という動物ですが、そういった動物が生活を支えていることも事実であります。なかなか、最近のふだんの生活では家畜を意識することは少なく残念ながらなってしまうわけですが、日本全国では牛は395万頭、豚に至っては953万頭で、犬あるいは猫というペットと遜色のない頭数が飼育されている状況にあります。鶏に至っては3億羽で、非常にたくさんの動物たちが我々の身近にいることとなります。

災害が発生しますと、ペットと同様にこういう家畜も被災する事態に至るわけですが、皆様の御記憶に新しいところでは、例えば福島県原発周辺を徘徊している牛や豚も御記憶にあるかと思

いますし、最近では鹿児島県の口永良部の噴火で、あのときも家畜を残して島を出ないといけなかったということが発生しました。

このように家畜が災害により被災した際に、これらの動物を助けてほしいという声をよく聞くわけですが、そもそも家畜は人の生活に役立てるために飼育されている性質を持っている動物、ですから災害対応の際には、このような家畜の本来の役割も踏まえた対応が必要ではないかと思えます。また、家畜を助けることそのものも非常にたくさんの困難を伴うことが挙げられます。

このような背景の中、きょうのシンポジウムでは、災害が発生した際に、畜産業は実際にどのような困難に直面するのか、皆さんとまず確認していきたいと思えます。その上で、日本の畜産の状況も踏まえた災害への対応の方向性も議論していきたいと考えております。

そのために、きょうは独立行政法人家畜改良センターより犬飼史郎先生、同じく吉臭努先生、協同組合日本飼料工業会より長谷川敦先生、最後に兵庫県農政環境部より本田義貴先生という、各分野を代表する4名の先生方にお集まりいただき、議論のきっかけとなる御講演を頂戴したいと思います。

申しおくれましたが、私は本シンポジウムで座長を務めることになりました神戸大学農学研究科の大山と申します。私自身大学におりますが、所属は附属農場で、うちの農場でも100頭ほど但馬牛を飼育していることもあって、家畜の被災に関しては無関係な人間ではないつもりです。



本日は限られた時間ですが、実りのあるシンポジウムにしたいと思いますので、御参集の皆様の活発な御意見をどうかよろしくお願ひしたいと思ひます。

きょうのシンポジウムは、最初に犬飼先生、吉臭先生、長谷川先生より御講演をいただいた後で、少し休憩を挟みまして、兵庫県の本田先生に御講演を頂戴したいと思ひます。引き続きパネルディスカッションという流れで進めたいと思ひますので、よろしく御協力お願ひいたします。

早速ですが、犬飼先生より御講演をいただきたいと思ひます。先生のタイトルは、「災害発生時の家畜の取り扱いについて」でお伺ひしております。先生は現在家畜改良センターの改良部長という役職につかれておひまして、家畜改良の最前線でお仕事をされてるということであります。本日は、主に家畜が被災したときに直面する現実的な問題について、さまざまな角度からお話をいただけるかと思ひておひます。

では、犬飼先生、よろしくお願ひいたします。